

# 招 聘 研 究 員

氏 名 姚 瓊 (YAO Qiong)  
所属機関等 浙江工商大学 東亜研究院  
受入期間 2020年1月7日～2020年1月21日  
指導教員 小熊誠 (チューター: 王麗)  
研究課題 平安時代における攘疫祭祀研究



## 日本の平安時代における攘疫の儀式に関する研究

姚 瓊

平安時代に都である平安京で人口が増加するに従い、朝廷にとって疫病の流行が至急解決を要する災害問題となった。平安朝廷は、疫病等の災異が発生した際、しばしば宗教儀式を通じ攘疫と除災を行った。こうした儀式はその内容から神事、仏事、陰陽道の三種類に分類できる。同時に、挙行される頻度から、定期儀式と臨時儀式に分類できる。国家全体におよぶ疫病に直面した場合、こうした儀式が時には単独で、時には重複して挙行された。本稿では平安時代に行われた重要な攘疫の儀式を取り上げたい。

### 1 仁王会

奈良・平安時代において朝廷は攘疫を目的とした祭祀を頻繁に挙行した。神事、仏事、陰陽道という攘疫のための祭祀の中で、回数がもっとも多かったのが仏事で、それに神事と陰陽道が続いた。6世紀中頃、厳密に組織化され、法式が整い、宗教理論や経文がきちんとまとまっている仏教が日本に伝来したことで、原始神道に影響

がおよんだことは言うまでもない。しかし大化の改新後、原始神道の宗教化の歩みが加速し、平安時代には、皇位継承、遷都、立太子礼、出兵・征伐、外交交渉等の政治上の大事において、朝廷はしばしば神道の祭祀を採用した。しかし、国家と民衆の平安を守るという面において、仏教の働きは神道を上回るものであった。それゆえ水害・干害、地震、疫病等の災難に対し、朝廷は多くの場合仏教の法式を利用して除災を行った。

奈良時代には疫病が頻繁に流行したため、鎮護国家思想に基づく呪術的仏教が支配階層の間で広く受け入れられた。国分寺・国分尼寺の建立や盧舎那仏の鑄造は、こうした仏教推進政策の一環として行われたものだった。平安時代に入った後も、仏事法会は主に国家による攘疫の儀式として挙行された。攘疫を目的とした仏事の中で、比較的多く見られたのが仁王会である。それゆえ本稿では、平安時代において攘疫のために挙行された仁王会について、以下のとおり整理を試みた。

●表1 『大日本古記録』における「仁王会」

時期	場所	攘疫の儀式	原因・目的	出典
天長6年(829)	五畿内封戸田園寺	演説仁王般若経	疫病始起	『法曹類林』第226巻、43頁
天長7年(830)	大極殿	転大般若経一七日	為除地震及疫病之災	『法曹類林』第226巻、43頁
天長8年(831)三月己未		奉読般若経	防疫癘	『法曹類林』第226巻、43頁



天長 9 年 (832) 5 月	五畿内諸国	奉転読大般若金剛般若經	疫早相起。仍人物夭折	『法曹類林』第 226 卷、43 頁
延喜 14 年 (914) 4 月 28 日		修仁王会	祈禱豊年。消伏疾疫	『新增国史大系・本朝文粹』第 2 卷、41 頁
天曆 2 年 (948) 5 月 5 日	諸社	行仁王会事	炎旱重日、疾疫間聞	『九曆』、8 頁
天徳 2 年 (958) 5 月 17 日	石清水、賀茂上下、松尾、平野、大原野、稲荷、春日、大和、住吉、比叡、西寺御霊堂、上出云御霊堂、祇園天神堂	転読仁王般若經	疾疫多発。死傷遍聞	『類聚符宣抄』第 3 卷、79-80 頁
永祚元年 (989) 6 月 24 日	大極殿	転読 (仁) 王經	天下疫氣尤熾	『小右記』第 1 卷、187 頁
正暦 5 年 (994) 4 月 20 日	東大寺仏前	転読大般若經	疫癘滋発。人民憂悩	『類聚符宣抄』第 3 卷、81 頁
長徳元年 (995) 4 月 27 日	五畿内七道諸国司	図写供養六観音像大般若經一部	疫癘延蔓。病苦弥盛	『類聚符宣抄』第 3 卷、82 頁
長保 4 年 (1002) 12 月 9 日	東大寺	転読仁王般若經	有兵革疾疫事	『類聚符宣抄』第 3 卷、82 頁
長和 4 年 (1015) 5 月 15 日	世尊寺御匣殿	七七法式、臨時仁王会	攘時疫	『小右記』第 4 卷、27 頁
寛仁元年 (1017) 5 月 25 日	十五大寺、延暦寺	転読仁王般若經	攘出疫癘事	『類聚符宣抄』第 3 卷、83 頁
寛仁 4 年 (1020) 12 月 16 日	大極殿	仁王会事	攘疫癘	『小右記』第 5 卷、263 頁
寛仁 4 年 (1020) 閏 12 月 25 日	大極殿	仁王經御読經	攘疫癘	『小右記』第 5 卷、271 頁
治安元年 (1021) 4 月 26 日	諸社 (石清水、賀茂上下、松尾、平野、稲荷、春日、大原野、大神、住吉、梅宮、吉田、祇園、北野、比叡、西寺御霊堂)	講演仁王般若經	疫疾滋起	『類聚符宣抄』第 3 卷、84-85 頁
万寿元年 (1024) 3 月 10 日	大極殿	供養心經百卷、仁王經十部、恒例年首善	為攘疫癘災	『小右記』第 7 卷、15 頁
万寿 3 年 (1026) 5 月 13 日	山陽道諸国司	転読仁王般若經	攘除疾疫兼慎兵革事	
長元 3 年 (1030) 4 月 6 日	諸社 (石清水、賀茂上下、松尾、平野、稲荷、春日、大原野、大神、住吉、梅宮、吉田、祇園、北野、比叡、西寺御霊堂)	講演件經	疾疫既発。須求攘除	『類聚符宣抄』第 3 卷、87-88 頁
長元 3 年 (1030) 4 月 27 日	大極殿	転読大般若經	為攘疾疫癘	『小右記』第 8 卷、171 頁
長元 3 年 (1030) 6 月 20 日	大極殿	講演仁王經	是為攘疫癘	『小右記』第 8 卷、179 頁
承德 2 年 (1098) 4 月 26 日	興福寺、東大寺、延暦寺	御読大般若經、観音經	依天下疾疫之間也	『中右記』第 4 卷、26 頁
嘉承 2 年 (1107) 4 月 22 日	諸寺、興福寺、延暦寺、圓城寺	転読大般若經	近日天下不閑、疾疫間聞	『中右記』第 7 卷、63 頁

上の表で整理したように、平安時代における攘疫を目的とした仁王經転読の記録によると、読經が行われた場所は主に五畿内諸国、山陽道諸国司、大極殿、御殿及び十五大寺、延暦寺であった。五畿内諸国とはかつて存在した京都付近の五国であり、具体的には山城国、摂津

国、河内国、大和国、和泉国を指す。また「七道」には東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道が含まれ、五国と合わせ「五畿七道」を成し、一般に古代の日本全国を指す語となった。仁王会は天下太平を祈求し、国家を鎮護するための法会であり、法会では



「護国三部經」である『仁王經』と『般若經』を読誦した。延暦年間、桓武天皇は国土を守護する經法のうち、仁王般若經を最優先のものとして選び、除災招福のために十五大寺に対し毎年仁王般若經を講じるよう命じた。「延暦 25 年（806）五月廿五日格云。令十五大寺每年安居奉講仁王般若經事。右消禍長福。護持国土者。仁王般若斯取（通“最”）居先。」とあるとおりである。仁王会における仁王般若經の読誦のほかにも、直接寺社において『仁王經』や『般若經』が読誦された事例も数多く存在する。

## II 御霊会と祇園会

「御霊会」は、疫病の流行は「御霊」のたたりであるとする民間の「御霊信仰」を起源とする。この民間信仰は平安初期に朝廷による攘疫の儀式に取り入れられるようになった。貞観 5 年（863）5 月 20 日、崇道天皇、伊予親王、藤原夫人、及び觀察使、橘逸勢等、平安初期の政治的失脚者を鎮謝するべく、平安朝廷は神泉苑において「御霊会」を挙行した。その後疫病が流行した際、御霊会は作為攘疫の手段の一つとして頻繁に挙行された。例えば貞観 7 年（865）6 月 14 日には、「禁五畿七道諸人寄事御霊会、私聚徒衆、走馬騎射。」とある。また長保 3 年（1001）5 月 9 日には、「于紫野祭疫神、号御霊会、依天下疾疫也。」とある。10 世紀半ば以降、「御霊会」は「祇園会」または「御霊祇園会」と名称が改められ、疫病が流行した夏に山城国愛宕郡八坂神社にて挙行された。『二十二社註式』には円融天皇が天禄元年（970）6 月 14 日に挙行した祇園会の記載が見られる。

## III 攘疫を目的とした神事

平安時代に攘疫を目的として行われた神事には主に「立奉幣使」、「大祓」、「賀茂祭」等がある。例えば、『本朝世紀』には、康和元年（1099）5 月 6 日、「被立廿二社奉幣使、被祈民間之疾疫也」と記載されている。また『日本紀略』には、治安元年（1021）6 月 16 日、「奉幣廿一社、依攘疾疫之難也」と記載されている。疫病流行

時における「大祓」については、『日本紀略』の中に、長保 3 年（1001）4 月 20 日、「於南殿並朱雀門等、有大祓、依攘疾疫也」と記載されている。また同日、朝廷では攘疫を目的として同時に賀茂祭が挙行され、「（賀茂祭）或云、禊日見物之車百両許、往還之者非幾、依疫癘之蔓延亡之者多、触事催無常之觀云云、仍見物計車不可過二百両」と記載されている。

## IV 結び

以上で取り上げた攘疫のために挙行された各種祭祀から見て取れるのは、平安時代の攘疫の儀式において、仏事、神事、陰陽道の祭祀が同日に挙行されたことはなかったものの、儀式の内容やそれを挙行した人物に目を向ければ、やはり神仏習合という平安時代の信仰上の特徴が浮き彫りとなる。

まず儀式の内容という視点からは、仏事に分類される「仁王会」、「祇園会」そして神事に分類される「立奉幣使」、「大祓」、「賀茂祭」等がある。次に、儀式を挙行した人物という視点から見ると、「御霊会」とのゆかりが深い「祇園社」の社家は、代々天台宗派の僧侶であると同時に、著名な陰陽師の家系である安部家の陰陽師でもあった。長和 4 年（1015）、京城で広範囲にわたり疫病が大流行した。それゆえこの年には攘疫のための仏事と神事が数多く挙行された。長和 4 年（1015）5 月 6 日、疫病の大流行を受け、臨時の仁王会が挙行された。この仁王会の挙行日時は陰陽寮による勘申を経て 5 月 15 日甲午と定められ、未の刻に発願し、申の刻に結願した。

このように平安時代における宗教信仰は、終始神仏関係によって貫かれたもので、攘疫を目的とした宗教活動においてもこうした特徴が見て取れる。本稿では字数の制限上、平安時代におけるさまざまな攘疫の儀式について論述することはかなわず、それらの攘疫の儀式を列挙するのみにとどまった。また次の機会において、平安時代のさまざまな攘疫の儀式について詳細な分析と論述を試みたい。



日本平安时代随着都城平安京人口的增加，疫病的流行成为朝廷急需解决的灾害问题。平安朝廷在疫病等灾异事件发生时，往往通过宗教仪式进行攘疫消灾。这些仪式从内容上来看又分为神事、佛事和阴阳道三类；从举行的频率上，又可分为定期性仪式和临时性仪式。面对国家范围的疫病时，这些仪式有时是单独举行，有时又可叠加举行。本文将试着列举平安时期重要的攘疫仪式。

### 1. 仁王会

以攘疫为目的的朝廷祭祀在奈良・平安时期频繁举行，神事、佛事和阴阳道的攘疫祭祀中，从数量和种类上来看，佛事最多，其次是神事和阴阳道的祭祀。自佛教从6世纪中叶传入日本，因佛教的组织严密、法式健全，且

有一整套宗教理论和经文，对原始神道的冲击自然不言而喻。然而，大化改新后，日本原始神道的宗教化进程加快，平安时期在天皇继位、都城的迁移、立皇太子、出兵征伐、外交交涉等政治大事上，朝廷往往采用神道祭祀。但是，佛教在维护国家与百姓的平安方面，其作用优于神道，因此诸如水旱灾、地震、疫病等灾难时，朝廷则多利用佛教法式达到消灾的目的。

奈良时期，疫病的频繁流行使以镇护国家为宗旨的咒术佛教受到统治阶层的推崇，国风寺、国分尼寺的建造和卢舍那大佛的铸造就是一系列推崇佛教政策的表现。进入平安时期，佛事法会仍然是国家攘疫仪式的主要部分。以攘疫为目的所举行的佛事中，以仁王会较多见。因此笔者试着将平安时期为攘疫而举行仁王会整理如下表：

●表一：《大日本古记录》中的“仁王会”

时间	地点	攘疫仪式	原因・目的	出典
天長 6 年（829）	五畿内封户田园寺	演说仁王般若经	疫病始起	《法曹類林》卷 226，第 43 页。
天長 7 年（830）	大极殿	转大般若经一七日	为除地震及疫病之灾	《法曹類林》卷 226，第 43 页。
天長 8 年（831） 三月己未		奉读般若经	防疫病	《法曹類林》卷 226，第 43 页。
天長 9 年（832） 5 月	五畿内诸国	奉转读大般若金刚般若经	疫旱相起。仍人物夭折	《法曹類林》卷 226，第 43 页。
延喜 14 年（914） 4 月 28 日		修仁王会	祈祷丰年。消伏疾疫。	《新增国史大系・本朝文粹》卷 2，第 41 页。
天历 2 年（948） 5 月 5 日	诸社	行仁王会事	炎旱重日、疾疫间闻	《九历》第 8 页。
天德 2 年（958） 5 月 17 日	石清水、贺茂上下、松尾、平野、大原野、稻荷、春日、大和、住吉、比叡、西寺御灵堂、上出云御灵堂、祇园天神堂	转读仁王般若经	疾疫多发。死伤遍闻。	《聚类符宣抄》卷 3，第 79-80 页。
永祚元年（989） 6 月 24 日	大极殿	转读（仁）王经	天下疫气如炽	《小右记》卷 1，第 187 页
正历 5 年（994） 4 月 20 日	东大寺佛前	转读大般若经	疫病滋发。人民忧恼。	《聚类符宣抄》卷 3，第 81 页
长德元年（995） 4 月 27 日	五畿内七道诸国司	图写供养六观音像大般若经一部	疫病延蔓。病苦弥盛。	《聚类符宣抄》卷 3，第 82 页
长保 4 年（1002） 12 月 9 日	东大寺	转读仁王般若经	有兵革疾疫事	《聚类符宣抄》卷 3，第 82 页
长和 4 年（1015） 5 月 15 日	世尊寺御匣殿	七七法式、临时仁王会	攘时疫	《小右记》卷 4，第 27 页
宽仁元年（1017） 5 月 25 日	十五大寺、延历寺	转读仁王般若经	攘出疫病事	《類聚符宣抄》卷 3，第 83 页





宽仁 4 年（1020） 12 月 16 日	大极殿	仁王会事	攘疫病	《小右记》卷 5， 第 263 页
宽仁 4 年（1020） 闰 12 月 25 日	大极殿	仁王经御读经	攘疫病	《小右记》卷 5， 第 271 页
治安元年（1021） 4 月 26 日	诸社（石清水、贺茂上下、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、大神、住吉、梅宫、吉田、祇园、北野、比叡、西寺御灵堂）	讲演仁王般若经	疫疾滋起	《類聚符宣抄》卷 3， 第 84-85 页
万寿元年（1024） 3 月 10 日	大极殿	供养心经百卷、仁王经十部、恒例年首善	为攘疫病灾	《小右记》卷 7，第 15 页
万寿 3 年（1026） 5 月 13 日	山阳道诸国司	转读仁王般若经	攘除疫疾兼慎兵革事	
长元 3 年（1030） 4 月 6 日	诸社（石清水、贺茂上下、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、大神、住吉、梅宫、吉田、祇园、北野、比叡、西寺御灵堂）	讲演件经	疾疫既发。须求攘除。	《類聚符宣抄》卷 3， 第 87-88 页
长元 3 年（1030） 4 月 27 日	大极殿	转读大般若经	为攘疫疫病	《小右记》卷 8， 第 171 页。
长元 3 年（1030） 6 月 20 日	大极殿	讲演仁王经	是为攘疫病	《小右记》卷 8， 第 179 页
承德 2 年（1098） 4 月 26 日	兴福寺、东大寺、延历寺	御读大般若经、观音经	依天下疾疫之闻也	《中右记》卷 4，第 26 页
嘉承 2 年（1107） 4 月 22 日	诸寺、兴福寺、延历寺、圆城寺	转读大般若经	近日天下不闲、疾疫间闻	《中右记》卷 7，第 63 页

从上表中平安时代以攘疫为目的转读仁王经的记录来看，读经的地点主要为五畿内诸国、山阳道诸国司、大极殿、御殿以及十五大寺、延历寺。五畿内诸国为古时京都附近五国，具体指山城国、摄津国、河内国、大和国以及和泉国，另有“七道”，包括东海道、东山道、北陆道、山阴道、山阳道、南海道、西海道，共组成“五畿七道”，泛指古代日本全国。仁王会是为祈求天下太平、镇护国家的法会，法会诵读作为“三大护国之法”的《仁王经》和《般若经》。延历年间，恒武天皇认为护持国土经法中，首选仁王般若经，于是令十五大寺每年奉讲仁王般若经，以消灾祈福，“延历二十五年（806）五月廿五日格云。令十五大寺每年安居奉讲仁王般若经事。右消祸长福。护持国土者。仁王般若斯最（通“最”）居先。”除了在仁王会上诵读仁王般若经，也多见直接于寺社中诵读《仁王经》、《般若经》的例子。

## 2. 御灵会和祇园会

“御灵会”起源于民间的“御灵信仰”，即认为疫病的流行来源于“御灵”作祟。这种民间信仰在平安初期开始进入朝廷的攘疫仪式。贞观 5 年（863）5 月 20 日，平安朝廷于神泉苑举行了“御灵会”，用以镇祭崇道天皇、伊予亲王、藤原夫人以及观察使、橘逸势等平安早期的政治失足者。此后，在疫病流行时，御灵会作为攘疫的手段之一时常被举行。例如，贞观 7 年（865）6 月 14 日，“禁

五畿七道诸人寄事御灵会，私聚徒众，走马骑射。”

长保 3 年（1001）5 月 9 日，“于紫野祭疫神，号御灵会，依天下疾疫也”。至 10 世纪中期以后，“御灵会”改名为“祇园会”，又叫做“御灵祇园会”，在山城国爱宕郡八坂神社于疫病流行的夏季举行。《二十二社注式》中有载圆融天皇天禄元年（970）6 月 14 日所举行的祇园会。

## 3. 以攘疫为目的的神事

平安时期以攘疫为目的的神事主要为“立奉币使”“大祓”“贺茂祭”等。例如，根据《本朝世纪》的记载，康和元年（1099）5 月 6 日，“被立廿二社奉幣使，被祈民間之疾疫也”，又如《日本纪略》的记载治安元年（1021）6 月 16 日，“奉幣廿一社、依攘疾疫之難也”。关于疫病流行时期“大祓”的记载，有《日本纪略》中长达保 3 年（1001）4 月 20 日，“於南殿並朱雀門等、有大祓、依攘疾疫也”的记载，而同一天为了攘疫朝廷同时还举行了贺茂祭，“（贺茂祭）或云、禊日見物之車百兩許、往還之者非幾、依疫癘之蔓延亡之者多、觸事催無常之觀云云、仍見物計車不可過兩百兩”。

## 4. 小结

由以上列举的为攘疫所举行的各类祭祀可知，平安时期的攘疫仪式中，尽管没有出现在同一天一并举行佛事、神事和阴阳道祭祀的情况，然而无论是从仪式中的内容，



以及举行仪式的人物来看，仍然体现出平安时期神佛习合的信仰特点。

首先，从仪式内容来看，有佛事类的仁王会、祇园会，又有神事类的“立奉币使”“大祓”“贺茂祭”等。其次，从举行仪式的人物来看。由与“御灵会”有沿袭渊源的“祇园社”，其社家带带都是天台流派的僧侣，同时也是著名阴阳师家族安倍家的阴阳师。长和4年（1015）京城爆发了大范围的疫情，因此这一年举行了多次攘疫的佛事和神事。长和4年（1015）5月6日，因疫情的爆

发，举行了一场临时性的仁王会。这场仁王会的举行时间由阴阳寮勘申后定于5月15日申午时举行，并在未2点时发愿，申2点时祝愿。

因此，纵观日本平安时期的宗教信仰，神佛关系始终贯穿始终，在以攘疫为目的的宗教活动中体现出现这一特点。本文限于字数限制未能将平安时期的各项攘疫仪式进行展开论述，仅对这一时期的攘疫仪式进行了列举，期待下次有机会可以将平安时期的各项攘疫仪式进行详细地分析和论述。

